

まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

関西元気企業



～ 「お茶」が紡ぐ人の輪。社会
貢献から国際交流まで ～

今回ご紹介する企業は、2004年の創業以降、こだわりの和東茶を茶葉から一貫生産し、通販により販売を拡大するほか、2008年からは「茶畑オーナー制度」を創設し、着実に和東茶ファンを増やしている京都おぶぶ茶苑です。「日本茶を世界へ」「農業を楽しく」「茶畑からの社会貢献」を目指し日々奮闘する代表の喜多章浩氏と、彼の志に感銘し、東京でのサラリーマン生活から転身し、同社の起業から携わってきた副代表の松本靖治氏を取材しました。

●和東茶との出会いは。

実家が茶農家とかお茶が好きとか、大学の専攻が農業とかいうきっかけらしいものではなくって、たまたま茶摘みのアルバイトでここ和東町を訪れたんですが、その時にいただいた一杯のお茶に大変感動したんです。それは、いままで飲んできたお茶とは全く違ったお茶でした。

●起業のきっかけは。

「このお茶を自らの手で作りたい」と思い、大学を中退し、修業を積むために茶農家にお世話になりました。日中は日が沈むまで茶畑で農作業、夜は深夜に及ぶ製茶作業と、まさに一日中、土とお茶にまみれての生活でした。こんな生活を10年送り、ようやく納得できるお茶を作ることができるようになりました。そこで今度は自分が経験したお茶の感動を多くの人に伝えたいという思いが徐々に大きくなり、2004年に京都おぶぶ茶苑を設立し、自分たちが育てたお茶をインターネットを通じて直接消費者にお届けする事業を開始しました。最近では農家の高齢化や価格低下による大量生産などもあって、各農家が収穫した茶葉は共同工場ですべてまとめて製茶されているので、

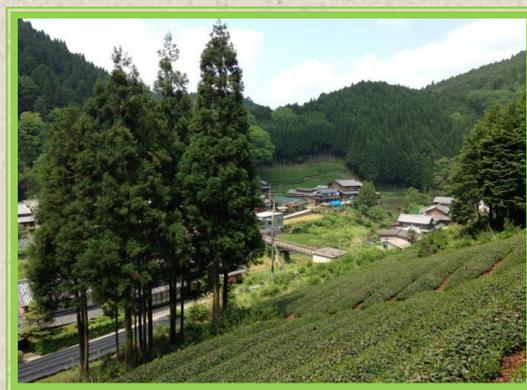
企業情報

名称 おぶぶ茶苑合同会社
所在地 京都府相楽郡和東町園大塚2
創業 2004年
代表者 喜多 章浩
従業員 4名 資本金 300円
H P <http://www.obubu.com/>



収穫をする代表の喜多さん。
均一に芽を刈るために同じ高さを保ちながら進むのが一苦労とのこと。

必ずしも自分が作った茶葉を製茶するわけではないのです。僕は自分が納得するお茶を作って、飲んでもらうために、日々、お茶の木の世話をし、収穫し、そして製茶するという昔ながらの作業にこだわっています。とにかく、毎日することがたくさんありますが、これがほんと楽しいのです。



茶畑から望む和東町の風景です。
手前の急な斜面が茶畑です。

●通販にこだわる理由は何ですか。

お茶の流通経路は、古くからあるために実に複雑で、生産農家から消費者まで問屋さんなど3~4のプロセスを経ることになるのですが、この流れに僕たちのような新参者が入る余地がありませんでした。でも、インターネット通販は、まだ始まって15年ほどの業界で、いわゆる(※)ブルー・オーシャンですので、全員が新参者ですから自由に展開できます。そしてインターネットという新しいフィールドで「和東茶のブランドイメージを高めたい」という思いで活動しています。

また、世界のお茶愛好家のために海外通販も行っています。これまでアメリカ、フランスをはじめ44か国に発送実績があります。

(※) ブルー・オーシャン…競争者のいない新たな市場。これに対して企業が生き残るために、高コストの激しい争いを繰り広げる既存の市場を「レッド・オーシャン」と呼ぶ。フランスの欧州経営大学院教授のW・チャン・キムとレネ・モボルニュにより、2005年に発表。(出典：(株)JMR生活総合研究所)

●人気の秘密は。

なんといっても高い品質です。和東町は800年の茶作りの歴史があり、宇治茶の主産地として有名です。そもそも「宇治茶」とは京都・奈良・滋賀・三重の四府県で栽培された茶葉を50%以上使用し、宇治で加工したお茶の呼称です。ですから、和東茶も広い意味では「宇治茶」となります。例えばワインで言うと、フランスワインという呼称が「宇治茶」で、ボルドーやブルゴーニュといった産地の入った呼称が「和東茶」といった感じでしょうか。

少し長くなりましたが、おぶぶが提供している茶葉のこだわりは、「和東産の茶葉を100%使用」し、「ブレンドや刻みなどの二次加工を一切しない」ことで、なるだけ手を加えず、「茶畑でとれたままのお茶」にこだわっています。このことで、お茶を一口含んだ時に茶葉本来の何とも言えない甘みが口の中一杯に広がるんです。

●茶畑オーナー制度について教えてください。

茶畑オーナー制度は、1日50円で茶畑一坪のオーナーになれるという仕組みです。

ここ和東町は800年以上の茶作りの歴史がある日本を代表する茶産地です。僕たちは和東に生まれたわけではありませんが、自分たちもこの和東の茶作りの歴史を未来につなぐ遺伝子だと思っています。また茶作りを含めた日本の農業全体に言えることですが、資金的なリスクや天候リスクなどあらゆるリスクを農家が背負っていると思うんですよね。そして農業の現場と消費者と呼ばれるお茶を飲んで下さっている方々との距離も相当離れているのが現状です。ですので、そういった現状を打破し、皆さんに楽しんでいただきながら、消費者と農家の距離を近づけ、収穫した農産物以外にもある農業や農村の価値を届けてゆきたいと思いを巡らせる中で考えついたのがこの制度です。現在では会員数は世界12か国、600名以上となっています。将来的には和東町の人口(4,532人(2013年6月1日現在 和東町ホームページより))を超えるというのが目標で茶畑オーナー5,000人を目指しています。町外町民が実人口を上回れば、町外のさまざまな人たちが現実の町を支えているという町おこしの一つのモデルケースにならないかなと考えています。

茶畑オーナーになると、年6回、オーナー様の茶畑で収穫したお茶を送らせていただくほか、茶摘み体験や植林体験など実際に栽培や収穫に携わっていただく機会もあり非常に好評です。

●社会貢献活動にも熱心に取り組まれているとか。

当社は農業(※)ソーシャル・ベンチャーを掲げているとおり、社会貢献活動に積極的に取り組んでいます。主な取組みは、障がい者授産施設との協働(作業の発注など)や児童養護施設の子供たちを招いての茶摘み体験などイベントの開催です。

世界的にみると豊かと言われている日本にも、障がい者の方々やさまざまな事情から両親と別れざるを得なくなった子供たちといったいわゆる社会的弱者は少なくありません。そんな彼らと共に働くことや農業を通じて世間の人たちの温もりを感じてもらいたいということがこの活動の根底にあります。実はこの取組みにも茶畑オーナー制度が活きていて、オーナーからお預かりした資金の一部はこういった社会貢献活動にも活用しています。ボランティアなど社会貢献をやってみようと思ってもなかなかできないという人たちもたくさんいらっしゃると思いますが、オーナーの方々にはこの活動にも共感をしていただいている、非常に喜んでいただいています。

(※) ソーシャル・ベンチャー…社会貢献や社会的問題の解決を主な目的とし、ビジネスを通じて解決を図るために起業したベンチャー企業またはベンチャー・プロジェクト。(出典：新語時事用語辞典)



茶畑でハイチーズ！！

左から副代表の松本さん、シモナさん(仏)、アンジーさん(リトアニア)、チャールズさん(米)、ジェニーさん(米)、喜多さん、アルバイトのマーティさん(日)

収穫した茶葉を運搬します。急こう配なのですべて人力です！！

●今後の夢や課題は。

夢は先ほども言いましたが「日本茶を世界へ」「農業を楽しく」「茶畑からの社会貢献」の実現です。そして、そのためにもさらに多くの茶畑オーナーにご参加いただきたいと思っています。ちなみに現在、当社の管理している茶畑の総面積は約3Haありますので、仮にいますぐ5,000人を達成しても対応できる面積は確保しています。これらの茶畑は、高齢で管理ができなくなった茶畑などを引き受けたりしているので、和東町内にとどまらず、お隣の木津川市なども含め15か所ほどに点在しています。

また夢と課題の両方にまたがる内容ですが、資金調達面でも茶畑オーナー様と協力関係を築くための方法を模索しています。2011年に「日本茶を世界へ」活動が経産省のジャパンブランド事業に採択されたのですが、その際、年商の1/3程度の資金が必要となりました。このような場合、金融機関へ相談を持ちかけるのが一般的と思いますが、間接金融での借金はなるだけしたくない(笑)ので頭をひねった結果、茶畑オーナー様限定の私募債を発行することにしました。私たちにとって決して少なくない額でしたが、22名の茶畑オーナー様のご厚意で金額1200万円を私募債で調達させていただきました。

この成功体験から、いずれはこの茶畑を活用した資金調達方法、例えば農地REITといった方法が実施できないかと時間を見つけてはいろんなシミュレーションをしています。

●外国人のインターンシップを受け入れているんですね。

2012年1月からは海外からのインターン生の受入れにも取り組んでいて、これま

でに 10 名の外国人インターンシップ生がお茶作りに携わってくれています。インターンシップですから当然給与はありません。その上、住居費や食費は自己負担という条件でありながらもインターネットを介して私たちの活動に共感した若者たちが海外からここ和東町まで来てくれています。やはり、日本や日本文化に興味があるんだと思いますが、その情熱はすごいです。実は当社の英語版 HP の構築から更新作業も彼らが自主的に行っています。

<取材後記>

京都から約 2 時間、京都府南部にある和東町は急峻な山が多く、その山肌に広がる茶畑の美しさは一見の価値があります。そんな町の一角に京都おぶぶ茶苑があります。代表は大学を中退して、副代表は民間会社勤務に限界を感じ新たな道を模索しているなかで「和東茶」が二人を引き合わせました。おいしいお茶のために日々茶畑で挑戦を続ける代表と販路開拓や資金調達、広報など時に斬新なアイデアを駆使して乗り切っていく副代表はまさに当社の『ツインターボ・エンジン』です。お二人の持ち場は異なりますが、そのパワーの源はやはり“お茶”と“お茶を通しての社会貢献”。大きな夢のあるお二人が中心となって心を籠めて作るお茶は、これまでの人生の中でも味わったことがないまるやかな甘みを感じました。また、社会的弱者に対してさまざまなイベントを企画されているというお話を聞いて、和東茶のようなほのかでありながらもしっかりとした“芯”のある優しさを提供されているんだと強く感じました。

取材当日は 4 名のインターンシップ生の方々がいらっしゃいましたが、皆さん日本語が堪能で、口々に「和東は静かできれいな街」、「お茶づくりは疲れるけど楽しい」といった声も聞かれました。

取材終了後、急峻な斜面に広がる茶畑にも案内していただきましたが、美しい景色として見るのと実際に登るのでは大違い。その傾斜は半端ではなく、息を切らせて登りましたが、そこから見る風景は格別でした。農業は自然を相手とした過酷な労働ではありますが、代表はじめ皆さんが素敵な笑顔で働かれているのも納得です。

掲載している情報は、平成 25 年 6 月時点のものです。